

書評

エデイス・シェフアー著（山田美明訳）

『アスベルガー医師とナチス』

発達障害の一つの起源』

（光文社、二〇一九年）

梅原 秀元

近年、日本では、ナチス期のドイツでの精神病患者や障害者に対する強制断種や「安楽死」と称した大量殺害に関心が高まっていて、関連する書籍が出版されている^①。これらでは、ナチスが極端な優生思想や人種主義思想をもち、障害者が犠牲になったことが前面に出ている。書き手も障害者の側に立ち、ナチスの蛮行から現在の日本社会の障害者の在り方への教訓を得ようとする立場をとる。と同時に、これらの書籍は歴史研究者によるものではない。ナチスによる強制断種や「安楽死」についての歴史研究は、ドイツ語圏を中心に、一九八〇年代以降急速に質・量ともに充実して^②いて、最近日本で出版された書籍は、最新の研究成果

を十分に反映させているとはいえない。

日本のドイツ史研究でも、ナチス研究は非常に重要な領域となっているにもかかわらず、精神病患者や障害者を対象とした強制断種や大量殺害（「安楽死」）についての日本人による歴史研究は評者の知る限り非常に少なく、木畑和子氏による論文や、ドイツの社会国家についての川越修氏の研究において取り上げられている程度である^③。翻訳も、この領域の重要な研究で一九九九年に翻訳されたエルンスト・クレーの『第三帝国と安楽死』（原著は一九八三年出版）などがあるが、絶版で手に入りにくいものが多い^④。

関心が高まっているのに最新の歴史研究が少ない日本の研究状況の中で、二〇一九年に翻訳出版されたのが、二〇一八年にアメリカ合衆国で出版された本書である。著者のエデイス・シェフアーは歴史家であり、自閉症スペクトラムと診断された子どもの母でもある。彼女は、自閉症スペクトラムの研究で知られ、最近まで病名にその名が使われていたハンス・アスベルガーと、彼のナチス期の研究と「彼の子どもたち（＝患者）」について、歴史研究によって迫ろうとしている。

全体の構成は、序とエピソードの間に一〇章からなる本論がある。なお、原著には詳細な注記がなされているが、本書では、それらはPDFファイルにまとめられ、最後の

頁にあるURLまたはQRコードからダウンロードできるようにしている。この工夫は、今後の歴史研究書出版の参考になるだろう。

次に、内容を見ていこう。

序では、本書が議論する問題が提示されている。まず第一に、アスペルガーと彼の自閉症についての研究が、ナチスの価値観、特に「民族共同体」(Volksgemeinschaft)の考え方に大きく影響されていたことを示すこと、次に、彼の「自閉的精神病質」という概念に基づく診断が、患者―特に、ここでは乳幼児から未成年までの年齢層の子ども―に、破滅的な結果―「安楽死」という名の下での殺害―をもたらす可能性があったこと、そして第三に、アスペルガー自身が「安楽死」の対象とする子どもを選別に関わっていたこと、第四に、一九八〇年代におけるアスペルガーの研究の再評価とアスペルガー自身のナチスの過去への評価との関係である。著者は、これらの問題を議論することを通じて、医学研究と政治・社会との関係、診断が患者に及ぼす影響、ある一つの専門知の国境を越えた受容とその影響とを考察しようとしている。

本論では、まず一九二〇年代から三〇年代ころのウィーン市における医療・社会事業の展開と、児童を対象とした精神医学研究とその実践が描かれる。それと同時に、この

ころに医学研究をはじめ、ウィーン大学で児童精神医学の中心に入っていくアスペルガーの足跡が描写されている。

この時期のウィーン市は、ウィーン大学元学長で著名な解剖学者だったユリウス・タンンドラーの指揮のもと、社会衛生的なアプローチによって、保健所や各種の相談所などからなる医療衛生のネットワークが、社会福祉行政とともに整備された。これによって、心身に問題があるとされた子どもにも医療・福祉行政が積極的に介入するようになった。さらにタンンドラーは優生学を否定しておらず、ウィーン市の新しいネットワークには、積極的・消極的優生学の考え方が随所に見られた。

児童少年のための医療・福祉行政の整備と並行して、ウィーン大学小児科の医師エルヴィン・ラツァールが、児童の精神的・知的発達を精神医学的に治療するものとして「治療教育学 (Heilpädagogik)」を提唱し、大学医学部に診療所を開設した。ラツァールはとくに、法に従おうとしない「非社会的」児童に注目し、その原因が、その児童自身がかつ要因による（内因的）のか、病気や環境などからの要因による（外因的）のかを見極めることを重視した。診療所での「非社会的」という診断は、市の児童福祉の措置とその診断を受けた子どもへの人生に影響を与えた。ウィーン市では、ラツァールの診療所とは別に、ジークム

ント・フロイトをはじめとする精神分析医たちが、児童や少年の支援に動いていた。こうした精神分析医たちとラツアールらの治療教育診療所も交流をもっていた。

治療教育診療所では、多忙のラツアールに代わって、所属の医師や看護師が自由闊達な雰囲気の下で、子ども達の回復と彼らへの支援のための強固なグループを形成していた。彼らの治療は、子ども一人一人に寄り添って綿密に観察し、それぞれの子どもの人격을把握することを通じて、彼らが、社会に溶け込めるように支援し回復させることを目的としていた。診療所のスタッフは、子ども達に否定的なレッテルを張り、社会から排除するようなことは考えていなかった。本書の中心テーマである「自閉的」についても、ラツアールのスタッフが既に使っていた。しかし彼らはこの概念を病気ではなく、社会的関係を結ぶことが難しいという特徴としてとらえていた。

ラツアールの急逝（一九三二年）後、所長となったのが、まだ二九歳だったハンス・アスペルガーだった。これには、一九二九年に急逝した小児科教授クレメンス・フォン・ピルケの後任に就いたフランツ・ハンブルガーの影響が大きかった。ハンブルガーは医学的にはさして有能ではなく、ナチスの熱烈な支持者で、一九三四年には黨員となった。この選出は大学医学部内の政争の結果だった。ハンブ

ルガーは小児科のスタッフを極右的な思想をもつ者に差し替えていった。その新しいスタッフの一人がアスペルガーで、彼自身もハンブルガーに私淑していた。アスペルガー自身はナチス黨員ではなかったが、政治思想は右翼に近く、ナチスの「民族共同体」の考え方にシンパシーをもっていたことが本書で示されている。

著者はアスペルガーと所員の論文や著書の引用関係の分析から、両者の間の学問的な関係が希薄だったことを示している。それと同時に、著者は、ハンブルガーや、アスペルガーが研修をしたライプツィヒ大学の児童少年精神科医パウル・シュレーダー、ベルリン近郊のゲルデン精神病院院長で、後にナチスの「児童安楽死」の鑑定人を勤め、T4作戦などの「安楽死」全般に深く関わったハンス・ハインツェといった、ナチスと密接な関係を持つ医学者とアスペルガーとの関係が深かったことを明らかにしている。こうした関係性を、著者は、ナチス精神医学で、社会的関係性を築く心的精神的素質として自閉症状の研究で重視された「ゲミュート (Gemüt)」の概念を、アスペルガーも自身の研究に積極的に取り入れたことに見ている。

著者によれば、「ゲミュート」は一八世紀に魂 (Seele) の同義語だったものが、宗教的な意味が薄れ、個人の感情や精神の最も奥底の部分を現す概念となり、ドイツ文化に

不可欠な概念となり、一九世紀前半には文化の文学や音楽など広範な領域で使われた。そして一九世紀後半には、芸術的な意味合いよりも、個人の前向きな感情や社会的感情を表す言葉へと変化した。一九二〇年代から三〇年代になると、ドイツ語圏の精神医学や心理学に「ゲミュート」が深く根を下ろしていった。ライプツィヒ学派の全体論的心理学のように「感情や経験、意識、性格をつなげる総合的資質」と理解したり、精神病理論で「ゲミュート」のあるなしが利他的、社会的、道徳的感情の有無と関係するとみなしたり、精神医学的な人種論で「ゲミュート」をドイツ人の特徴ととらえたりした。そしてナチス精神医学では、本来その人の奥底にあるはずの「ゲミュート」が、個人が全体（＝民族共同体）と一体化するための心的要素とされるようになった。パウエル・シュレーダーやその弟子のハンス・ハインツェは、彼らの児童精神医学・治療教育学の中心に「ゲミュート」を据えていて、それをアスペルガーは学んだのだった。

一九三八年には、ナチスドイツがオーストリアを併合し、オーストリアの医学界がナチスドイツ支持に染まり、ドイツ語圏の精神医学界もナチス精神医学の支持者のもとで強制的同質化された⁵⁾。それに合わせるかのように、アスペルガーは、児童の自閉症状に対して、一九三八年に自閉的精

神病理質という、ナチス精神医学に合わせた概念を提唱するに至った。さらに、同じころ、アスペルガーはナチスによる医療衛生政策に深く関与し、ナチスの強制断種政策にも賛成していたことが本書の後半で詳しく述べられている。さらに問題となったのが、一九三九年初めから準備され、一九四〇年以降本格的に始動した「児童安楽死」とアスペルガーとの関係だった。

「児童安楽死」は、「T4作戦」に先行して計画され、「T4」と並行して実施された、乳幼児から未成年の子どもの障害者や精神病患者を対象とした殺害作戦である。ベルリンの総統官房に作戦の司令部が置かれた。司令部には、全国から殺害候補となる子どもたちの調査票が送られ、精神科医のハンス・ハインツェら三人の鑑定医が殺害するかを鑑定した。戦争後半には、個々の病院で殺害が決定されることもあった。殺害が決まった子どもは、殺害拠点として一九四〇年から四五年の間に、主にドイツ領とオーストリアの大病院の小児科や精神病院に設置された「児童部門 (Kinderfachabteilung)」に移送され、そこで殺害された。ウィーン市には、アムシューピエーグルグランド精神病院内に「児童部門」が設置された。「児童安楽死」では対象となつた子どもを殺害するだけでなく、その死体（主に脳）を医学研究に利用したことが研究で明らかになっている⁶⁾。

従来、アスペルガーは、「児童安楽死」から自閉症の子どもを守った慈悲深い医師という像が広まっている。しかし、著者は、彼が助けたのは自閉症の子どもでも、症状が軽度であったり、何か他に「民族共同体」にとって役に立ちそうな能力がある子どもだけだったことを指摘し、それ以外の子どもに対してアスペルガーは、彼の自閉症的精神病質にもとづいて、治療不可能や教育不可能といった診断を下した。その診断が、その子ども達にとって破滅的な運命を決定づけると知った上でのことだった。そうした診断を受けた子どもたちは、アムシユピーゲルグルントの「児童部門」に移送され、目を背けたくなるような扱いを受けて殺されたことを本書は生々しく描いている。さらに著者は、アスペルガー自身が、「児童安楽死」の対象選定に関わっていたことも明らかにしている。これらから、著者は、アスペルガーは「安楽死」から自閉症の児童を守ったという戦後の言説は、一面的であり、アスペルガーの実像とは違うとしている。

そして、戦争末期の一九四四年に発表されたアスペルガーの有名な自閉的精神病質の論文についての分析から、彼の自閉症論では、ナチス精神医学の重要概念「ゲミュート」が全面的に取り入れられ、「ゲミュート」の有無と共同体と自己を結び付ける能力との関係性に基づいて、自閉

的精神病質が論じられていることが明らかにされている。著者は、このことを、アスペルガーが、ナチス精神医学が支配的になっていく状況に、彼の研究を合わせたためであるうとしている。したがって、戦後、状況が変わったことで、アスペルガーは自閉的精神病質の児童への否定的な言説を極力控え、良い点を強調した。そもそも、彼は戦後、自閉症についての研究をしなくなっていた。

著者は、ナチス支配下におけるアスペルガーについて、彼は確かにナチス黨員ではなく、熱烈なナチス支持者でもなかったが、精神科医としてナチス精神医学と密接に関わり、「児童安楽死」に一定の役割を果たし、黨員でなくともナチス支配下でそれなりの地位を保ち、学問的にも成功していたことは否定できないと考えている。そして、彼のような存在が、ナチスの支配と蛮行を可能にしたと主張している。さらに、アスペルガーをはじめ、「児童安楽死」に関わった多くの医師は戦後もそのまま医師として活躍し、ナチス期の過去や罪と向き合うことはなかった。他方で、強制断種と「安楽死」の犠牲者や家族は、心身のダメージに戦後も苦しめられたことにも言及されている。

最後のエピソードの章では、アスペルガーの「自閉的精神病質」の概念は、一九八〇年代に発見されるが、その時にはナチスとの関係が切り離されたことが指摘されて

いる。そして「自閉的精神病質」という言葉は、「自閉症」という言葉に置き換えられ、さらに、国際的な診断基準には「アスペルガー障害」という別の名前で加えられ、近年では「自閉症スペクトラム」という名前となって世界中に広まり、自閉症診断の過剰を招くことになったとされている。

本書は精神医学の専門用語が頻出するにもかかわらず、訳文は非常にわかりやすく読みやすいものになっている。ただし、重要な単語の訳が適切ではない。特に、一二七頁の小見出しにある「ナチスの優生保護法」は明らかな誤訳である。ナチスドイツに優生保護法という名称の法律はない。これは強制断種を可能とした遺伝病子孫予防法のことである。また「民族衛生」も、人種衛生または人種衛生学が正確な訳語である。良い訳文なので、重要な言葉は正確に訳してほしい。

また、本書で「児童安楽死」の契機として「クレッチマーの子どものケース」が紹介されているが、現在の研究では、クレッチマーというファミリーネームではなく、重い障害の子どもを死なせるようお願いした親族がいたであろうということまでが明らかになっていて、それが誰だったのかは分からないままである。⁷⁾

著者は、本書において、ナチスの「民族共同体」に入る

べき個人とそうでない個人の選別という、社会的な問題の解決に、アスペルガーの科学的研究が寄与していたことを示している。これは、ドイツの歴史研究者ルッツ・ラファエルが提示し、現在ではドイツの科学社会史研究で基本概念となっている「社会的なことの科学化」⁸⁾の典型的な例とみることができよう。さらに、アスペルガーが自閉的精神病質の概念をナチスに合わせるように変えたことは、精神医学、さらには科学が社会との関係で、科学の側から社会に意識的・無意識的に迎合する可能性を示している。このように、本書は、さまざまな角度から医学・科学と社会との関係を読者に問うている。

本書は、障害に関わる様々な問題が、どのような過去を背景にして起きているのかを、歴史的に明らかにしたものであり、ナチス期の医学や科学のありようを一人の医学者（科学者）を通して描いている。障害学や障害運動に関係している人たちはもちろんのこと、医学・科学と政治・社会との関係の歴史研究や、ナチス期の歴史に関心のある人たちにこそ手に取ってほしい研究書である。

註

- (1) 藤井克徳『わたしで最後にして ナチスの障害者虐殺と優生思想』(合同出版 二〇一八年)。スザンヌE・エヴァンズ(黒田学、清水貞夫訳)『障害者の安楽死計画とホロコースト ナチスの忘れ去られた犯罪』(クリエイツかもがわ 二〇一七年)。ヒュー・G・ギャラファアー(長瀬修訳)『新装版 ナチスドイツと障害者「安楽死」計画』(現代書館 二〇一七年)。
- (2) 概観として以下がある。Robert Jütte / Wolfgang U. Eckart / Hans-Walter Schmuhl / Winfried Süß (Hrsg.), *Medizin und Nationalsozialismus. Bilanz und Perspektiven der Forschung*, Göttingen, Wallstein Verlag, 2011; Wolfgang U. Eckart, *Medizin in der NS-Diktatur. Ideologie, Praxis, Folgen*, Köln, Böhlau Verlag, 2012.
- (3) 木畑和子「民族の『健康』を指して—第三帝国の保健衛生行政」川越修/矢野久編『ナチズムのなかの20世紀』(柏書房、二〇〇二年)、一五八—一八九頁。木畑和子「第二次世界大戦下における『安楽死』問題」井上茂子他共編著『1939ドイツ第三帝国と第二次世界大戦』(同文館、一九八九年)、二四三—二八三頁。川越修『社会国家の生成』(岩波書店 二〇〇三年)。
- (4) エルンスト・クレー『第三帝国と安楽死 生きるに値しない生命の抹殺』(松下正明監訳)(批評社、一九九九年)。
- (5) 一九三五年に、主要なナチス精神医学者の一人、エルンスト・リユディンを学会長としてドイツの全ての精神科医・

- 神経科医・心理療法師を統括する団体としてドイツ精神神経科医・精神科医学会が設立された。一九四〇年には、児童精神医学と治療教育学を統括する団体としてドイツ児童精神医学・治療教育協会が設立され、パウエル・シュレーダーが会長になった。後に、一九四一年にはハンス・ハインツェが会長になり、「児童安楽死」を医学界から支えることになった。ドイツ精神医学界については、Hans-Walter Schmuhl, *Die Gesellschaft Deutscher Neurologen und Psychiater im Nationalsozialismus*, Heidelberg, Springer Verlag, 2016 を、児童少年医学と治療教育学については、Heimer Fangeraur / Sascha Topp / Klaus Scheppler (Hrsg.), *Kinder- und Jugendpsychiatrie im Nationalsozialismus und in der Nachkriegszeit. Zur Geschichte ihrer Konsolidierung*, Heidelberg, Springer Verlag, 2017 を参照せよ。
- (6) Thomas Beddies / Kristina Hübener (Hrsg.), *Kinder in der NS-Psychiatrie*, Berlin, be.bra Wissenschaft verlag, 2004.
- (7) Udo Benzenhöfer, *Der Kinder- und Jugendpsychiater Hans Heinze und die „NS-Euthanasie“ unter besonderer Berücksichtigung der „Kinderfachabteilung“ in Görden* (Frankfurter Studien zur Geschichte und Ethik der Medizin, Neue Folge, Bd. 6), Ulm, Klemm+coelschläger, 2019, hier bes. S. 24ff.
- (8) Lutz Raphael, „Die Verwissenschaftlichung des Sozialen als methodische und konzeptionelle Herausforderung für eine Sozialgeschichte des 20.

エドイス・シェフアー著（山田美明訳）『アスベルガー医師とナチス 発達障害の一つの起源』（梅原）

Jahrhunderts”, in *Geschichte und Gesellschaft*, Bd. 22, 1996, S. 165-193; ders., “Embedding the Human and Social Sciences in Western Societies, 1880-1980. Reflections on Trends and Methods of Current Research”, in Kerstin Brückweh / Benjamin Ziemann / Dirk Schumann / Richard F. Wetzell, (eds.): *Engineering Society. The Role of the Human and Social Sciences in Modern Societies 1880-1980*, London, Palgrave Macmillan, 2013, pp.41-58.

（立教大学・兼任講師）